

森立之の生涯 9

明治維新に於ける立之周囲の人々

森立之(1807～1885)

今回は森立之の生涯の親友であり、学問上では肝胆相照らす仲であった澁江抽齋の墓の碑文を取り上げました。抽齋は安政五年(1858)に五十二歳で死んでいますから、明治維新の九年前です。

この維新前が立之がもつとも輝かしい業績を上げた時期で、抽齋の墓銘を読む前には、立之の業績について見ました。その時に、幕末の立之周囲の人々を見ましたが、維新後への流れがよく分るように幕末も少し重複させて、立之と彼をとりまく人々の様子を見ることにしたいと思います。

■ 森立之周囲

■ 伊澤・福山藩関係

■ 幕府関係

嘉永五年(1852)伊澤榛軒^{しんけん}が病臥す。榛軒、女の柏に田中良安^{らうあん}とを配す。田

中良安は、松川町の醫師田中淳昌の遺子。後に棠軒と号す。丹波臣庭の周旋による。11/16 早朝、榛軒卒去。

安政元年(1854)澁江抽齋、医学館講師となる。立之も同年、少し遅れて、医学館講師となる。阿部正弘(幕府老中首座)公に謁見す。医学館では金匱要略の講義を担当。ほかに神農本草經。

安政二年(1859)十月二日夜 安政大地震 阿部正弘夫人、松平氏謚子^{しつこ}の侍女七人圧死。阿部正弘は第一番に登城した。中橋の柏軒の家では、前月から妻俊^{とよ}が病臥していたので、風邪をひいた女安^{やす}のために立之の母

(森全忠恭忠の妻)が来ていた。妻俊は鐵三郎⁷を連れて轎(かこ)に乗り、湯島の狩谷氏に避難し、これに徒歩で森の祖母君(五代目親徳の妻か?)が従った。中橋の家では、柏軒側室春が安⁴と琴¹を保護した。

安政四年(1857) 立之「本草経攷注」十八卷完成

六月 阿部正弘没³⁹。阿部侯の病は柏軒が単独で治療に当たった。

阿部正弘



安政五年(1858) 澁江抽齋没⁵²

安政六年(1859) 棠軒の長男棠助生、後の徳⁶⁰。

萬延元年(1860) 素問攷注起業 立之⁵⁴

文久三年(1863) 正月 柏軒⁵⁴、將軍家茂に京都上洛の供を命ぜらる。

六月 柏軒、京にあつて病む。

七月 柏軒没⁵⁴。腎萎縮による尿閉か。京都に葬らる。

素問攷注第十一卷刺腰痛篇第四十一終 文久第三曆仲夏既望書畢
未知有間人森立之竹養翁
頃日梅天無雨炎蒸不堪端午作
外夷未發兵 銳氣滿江城
空看千門上 高風動旆旌

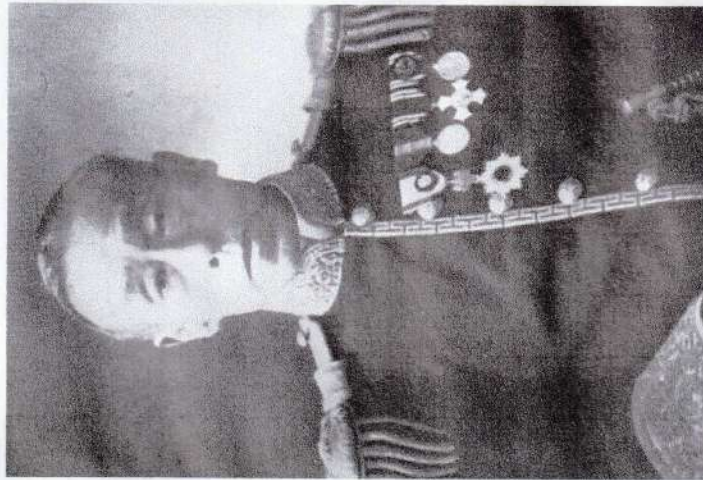
外夷いまだ兵を發さず 銳氣、江城(江戸城)に滿つ
空に看る千門の上 高風、旆旌(旗)を動かす

元治元年(1864) 立之 58 躋壽館講師となる。男約之^{ひよりのゆき}も講義に列席。医学館講
書の功勞により月俸を賜る。

「素問攷注」二十卷卒業。十一月「傷寒論攷注」起業、慶応四年
三月 「遊相医話」印行

慶應三年(1876) 福山侯阿部正方 20 没。棠軒 32、福山から江戸へ急行
四日後には福山へ赴く(蒸氣船)。福山では、妻子を百姓家に預
け長州兵に應戦。この後、家を城下から村方へうつし、阿部公
(正桓・十代)が津輕藩応援のために出兵するに及び、函館に上陸。

阿部正桓



慶應四年・明治元年(1868) 慶応四年二月七日 医学館での傷寒論講義を少陰病
篇で中断となる。

「慶応四戊辰の年三月廿三日(現歴415)作樂書屋にて書す。
近日、官軍の諸卒、已にして都下に入り、四隣寂寥として、細雨
は蒙昧とす。満目の春色却つて秋色の如く覚ほゆ、噫。

華一翁森立之」…傷寒論攷注・第三十四卷あとがき
躋壽館では恒例の発会式も行われず、講義も休みがちになる。
六月十日 躋壽館閉館。

三月 「傷寒論攷注」全三十五卷なる。

七月 立之 62 備後福山に移り、城南医者町に居をトす。

四月 抽齋の嗣子・成善保^{しげよし}に江戸・亀沢町の自宅・土地三千坪

を僅か四十五両で売りはらい、弘前をめざして江戸を発つ。同道は五百⁵³、陸⁵³、水木¹⁶、専六¹⁵、以上家族。その他異母兄で矢嶋家の後嗣となつた優善³⁴に若党二人が従い、また同藩の矢川文一郎²⁸、浅越玄隆³¹(この二名、拙齋門下の表医師)。

明治二年(1869) 十月 阿部正寧御不快のため、立之⁵³ 東京へ急行。

十一月八日 立之、東京丸山の福山藩邸に到着。

福山の兵は函館から青森に退く。ここで棠軒²⁴は五百に会つて久闊を叙す。

五月十二日、官軍の総攻撃開始。

十八日、榎本武揚は五稜郭を開城。

二十四日、福山藩兵隊は東京府まで引きあげを決定。藩の医師三人が、負傷者をまとめるため、居残りを仰せつけられた。

二十五日、朝十時、英船アラビアン乗船、夕四時箱館港出帆。

二十九日、朝四時、品川着船。鮫洲川崎屋へ上陸。病院は廣嶋屋太兵衛へに落着く。

一同へ出征料として三両ずつ下賜。

六月一日、天朝より一同へ御酒御肴の下賜あり。

二日、福山藩丸山邸にて、岡田總督はじめ夫卒まで御酒と吸物の下賜あり。

福山にてこの二月、紋次郎、痘死の由を聞く、年わずかに二歳。

五日、大殿様(四代前の正寧)より御酒御肴の下賜あり。かま屋、川崎屋の両所にて開宴。

八日、朝五時、大坂艦乗船、十時品川出帆。

十日、夕七時半、福山^{ともろ} 輛浦着船、上陸。善行寺一泊。

十一日、朝五時半、輛浦を発つ、水呑村にて昼食。飯田安石(棠軒養母の家)、

吟平^{まへい}出迎え。午後八時半、福山城到着。鐵御門前へ一等官御出迎え。それより御宮拝礼、御酒頂戴の上引取る。〈伊澤棠軒・従軍日記〉

明治三年(1870) 二月二十二日 伊澤棠軒²⁴が東京に在番となる。

立之⁵⁴は当分の内、御差留め仰付けらる。棠軒、枳園を伴つて団子坂敷蕎麦にて飲。

三月十六日 立之、歸藩仰付けらる。

明治四年(1871) 四月 澁江保(成善)¹⁵は上京、本所二ツ目弘前藩邸におちつく。

この頃、海保竹逕ちくけいが神田お玉が池あんだくに、多紀安琢が矢の倉(浜町多紀家)に居たが、安琢は維新後困窮して、竹逕の扶養を蒙っていた。竹逕は海保漁村しぎいの女婿(むすめむこ)。

保は竹逕の毛詩(詩経)の講を受けたが、安琢に素問を学ぼうとは思わなかった。竹逕も会陰に腫瘍を病んでおり、やや衰弱していた。

十二月 保、斬髮。

六月三日 森約之 37 福山で熟れ鮓にあたり中毒死。名は春雄。妻・

大槻氏陽、女くわう(鑛)、りう(柳)有り。約之の妻陽は仙台藩士大槻磐溪の次女で、大槻文彦「言海」(大槻脩(如電)・「東西年表」「洋学年表」)の姉。当人は学問・教養はなかった。へ川瀬一馬「日本書誌学之研究」へ

※講座内では熟れ鮓にあたっても死ぬほどの食中毒ということはありません、むしろ吐瀉物を喉に詰まらせて死んだということではないか、との見解あり。

六月六日 棠軒、夕、森へ悔みに行。

七月七日、八日 棠軒、平野杉右衛門へ往き、亀三郎 16(知之を枳園の養子にする媒酌をする。●(鷗外)按ずるに亀三郎 16 は春雄(約之)の長女くわう 13 に迎られた婿である。

十一月 約之につづいて妻の勝が六十歳で病死。

素問放注第十卷瘧論篇第三十五終

文久壬戌二年・1862)小春廿四酉下刻燈火収毫於問津館

此の日、磐溪大槻翁、君命に應じて、仙臺に移る。此の詩を賦して、以て別る。

勿言分手隔天涯 手を分かち、天涯を隔つと言ふ勿れ

自有飛鴻報月花 自ら飛鴻(手紙)有りて、月花を報せむ

若比蕃夷通信邈 若し蕃夷(ひと)に比しく、通信(おとぎ)邈(おと)なるとも

一千里外是隣家 一千里の外も、是れ隣家

牧羊齋主森立之

明治五年(1872) 二月、立之 66 福山を発つ。棠軒 39 「人を送つて芳野に遊ぶ。この詩高田豊翁、森養竹を送る者なり。二人は同行するに非ず、前後一、二

日、相継いで發す、芳山^{ほやま}※萬樹の櫻を看んと發し、旅装纏(わずかに一瓢を携えて行く、宛然先輩の花を尋ねて去くがごとし、栢(ハク・かしわ)笠飄飄として菅笠^{すげがさ}輕し」※芳山は古都奈良の中央にある低山で、春日山石窟群、芳山三面石仏、首切地蔵など、石仏を多数抱く静かな里山。

五月 立之、東京に出る。五月二十七日文部省十等出仕。湯島切り通しの店造りの借家に住んだ。立之はその店先に机を据えて本を読んでいた。保「売卜者のようじゃありませんか」

しばしば立之は保を山下の雁鍋、駒形の川桁などに伴い、酒を被^{あぶ}つて世を罵った。

澁江保に師範学校入学。学生は月に十円の給付が得られ、これをもとに母・五百を東京に迎えるつもり。

五月、五百⁵⁷、保のもとに着く。

埼玉県庁に勤め、典獄(刑務所長であつた矢嶋^{ゆたか}優³⁸(抽齋の二男・優^{宇すし}善))の権勢は大きくなり、この當時食客數十人を養つていた。

六月 海保竹逕⁵⁶没⁵⁶ 嗣子は繁松⁷ 保は竹逕没後、嶋田篁村⁵⁵を漢学の師とした。

九月二十五日 森家(養嗣子亀三郎?)、年内東京転移に付、棠軒に一切相談。

十一月五日 棠軒「森家引越に付、大黒屋直右衛門方へ行」

十二月二日 太陽曆採用 明三日より一月第一日と御改正。

明治六年(1873) 立之⁵⁷ 家族を福山より迎える。住所は神田元岩井町⁵⁸番地。家

族は立之に後妻・篁村^{たかむら}氏百合がいることに驚く。

立之、私塾正名学舎をひらく。月謝五十銭。授業は平日8〜11時、3〜6時。土日休講。学舎とは別に各種代作。発句・一句五銭以上、絶句一首二十銭以上、律は一首五十銭以上。動植物鑑定、不審文字質問は一品一字につき三銭より。ほかに文章、序跋、引札名弘など。

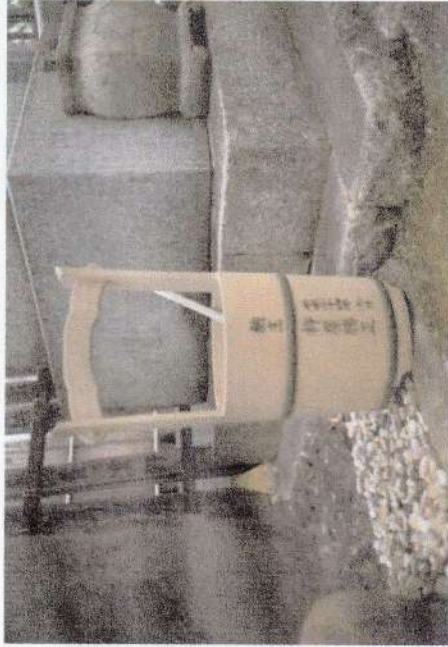
二月 保⁵⁷、本所相生町四丁目に就居。保の十圓と五百⁵⁸の裁縫とで、生計をたてる。喘息に悩んでいた弟の専六・山田修も同居。

八月 矢嶋³⁸、工部省に轉じ鉱山事務を取り扱う。優のもとにいた岡寛齋も、優に推挙せられて工部省の雇員となつた。

抽齋の娘・陸くわは矢川文一郎33と別れて、砂糖店を閉じる。陸は本所

亀澤町きねやかつひそで杵屋勝久の名で、長唄の師匠をはじめめる。

抽齋の墓のある感應寺に杵屋家から奉納されている手桶



三月 故柏軒の子磐35(磐安、家族を迎え取るため東京(南紺谷町佐藤勤兵衛方)から静岡に向う。身分は静岡県土族、戸籍は静岡第五大区百姓安右衛門方同居。家族母春(柏軒側室)、妹安、弟平三郎。(姉國は狩谷矩之に嫁す)

四月 磐一家、東京鳥居坂の宗家伊澤信崇34宗家に寄留す。

十月 棠軒長男徳(めくむ)35、算術を始む。

明治七年(1874) 立之38 「蘭軒遺稿」一巻を刊行。「蘭軒醫談」の補刊。

明治八年(1875) 十一月十日 棠軒32に枳園より書到来。「昨年来『蘭軒醫談』遺板

に付て補刊仕、前の板下書き候梶原平兵衛も既に没後、不得已拙筆にて補板仕候。外に『以呂波字原考』一冊、『詩史彙』一冊、共に上木仕候。市野光彦の家、跡方もなく断絶の様子(書を書かずの意・鷗外)。町人の学者はわづか三右衛門※といへる川柳点も、椽齋翁は誰も知れど、迷庵は誰も知らず、因よちて之を刻し世に公にせば、少年、抽齋と同じく升堂(学問が一定水準に達する)したる報恩の一端にも可相成乎と、拙筆を以て刊行仕候。…僕も壬申(明治5年)以来文部(出仕、間もなく被免、醫学校、

出、編書課に在、亦免官、朝野新聞に入、成嶋柳北と相交、夫より工學寮の本朝學課長となり、十月來又々被免、此節は閑無事、書肆の頼たのみに付、眞片仮名雜書編成仕候。…狩谷此節上野広小路へ御引越(矩之、本所横川より引越。矩之の妻國³²は棠軒の妹)、是亦平安也。……」

※「三右衛門」を名乗つた町人学者三人を、「三三右衛門」と称した。津輕屋三右衛門(狩谷椽斎・米問屋)、三河屋三右衛門(市野迷庵・質屋)、屋根屋三右衛門(北 静處・屋根葺棟梁)

十一月十六日 棠軒²²、病没。徳¹⁷が継ぐ。

一月 保¹⁹ 師範学校卒業。濱松師範学校教頭。矢嶋優¹⁸は家を畳んで三池に出張。

明治九年 多紀安琢、歿⁵³。名は元琰、號は雲從。「其後を襲いたのが上總國夷隅郡

總元村ちもとむらに現存してゐる次男晴之助さんである」(「澠江抽齋」その九十九)

明治十一年 伊澤徳²⁰、東京に出る。

明治十二年 徳、母柏かえを東京に迎える。

立之²²、温知社を結成。月刊誌「温知医談」

八月二十六日 立之の後妻百合没。

家族とはなれて日本橋坂本町に喬居。婢きよを使う。

その後、水谷町に移り、家族と同居。きよを免じ、婢とめを雇う。

とめは、その後、菊と改めさせらる(明治十三年)。

菊は三年ほど立之のもとにいたが、のち婚嫁。

菊のあとに、そよが来た。

十二月一日 立之、大蔵省印刷局出仕。月俸四十円。

「身分は准判官御用掛で、月給四十圓であつた。局長得能良介とくのうらは初め八十圓を給せようと云つたが、枳園は辞して云つた。多く給せられて早く罷められむよりは、少なく給せられて久しく勤めたい。四十圓で十分だと云つた。局長はこれに従つて、特に着宿として枳園を優遇し、土藏の内に畳を敷いて事務を執らせた。此土藏の鍵は枳園が自ら保管してゐて、自由にこれに出入した」(澠江抽齋 その百一)



十月 保、慶應義塾に入り英語を学ぶため、師範学校辞職。十一月、東京松本町に移り、慶應義塾本科第三等に編入。

明治十三年 四月 保、第二等に進級、七月に破格を以て第一等に進級し、十二月に卒業。当時、松本町の家には、保、五百、水木のほか、山田要藏、藤村義苗よしまね(旧幕臣、外国語学校露語科生として官費を給さる)

明治十四年 一月 清より楊守敬来訪。十五年十二月

八月 保²⁵、愛知中学校長の任が決まり、五百、水木とともに三河國寶飯郡國府町こほりこほに移る。保は家内の経済が許せば、英語を窮めたいと思っていた。

明治十五年 九月 矢嶋優⁴⁸は、札幌にあつて澁江氏に復籍。十月 妻蝶没³⁴。
十二月 保²⁶、東京に帰る。

明治十六年 一月 保²⁷、愛知県庁を辞し、攻玉舎に職を得た。

八月 保²⁷、五百⁸⁸病氣と見えて不食。

十二月二日 優⁴⁹、本所相生町の家³²に没。職を罷めるころから心臓に病があつた。「没する日には朝から物を書いてゐて、午頃『あゝ草臥れた』と云つて仰臥したが、それ切り起たなかつた」

明治十七年 二月十四日 午前七時、五百鳥森の家³³に没す⁸⁹。脳卒中であつた。

五百²⁹の婚については、日野屋山内氏では、上野広小路の呉服屋伊藤松坂屋の通り番頭^{32,3}を婿に擬していた。しかし五百の腹の内は違ひ、妻を亡くした拙齋を夫にもつて、日野屋の後見をしてもらいた

いと考えていた。そこで阿部家の醫師石川貞白に説いて仲立ちをしてもらった。「學問のある夫が持ちたい」「澀江さんの所へ往つて、あの方に日野屋の後見をして戴きたいと思ひます」

「貞白は五百の深慮遠謀に驚いた。五百の兄榮次郎も、姉安の夫宗右衛門も、聖堂に學んだ男である。若し五百が尋常の商人を夫としたら、五百の意志は山内氏にも長尾氏にも輕んぜられるであらう。これに反して五百が抽齋の妻となると、榮次郎も宗右衛門も五百の前に項を屈せなくてはならない。五百は里方のために謀つて、勞少くして功多きことを得るであらう。且兄の當然持つてゐるべき身代を妹として譲り受けると云ふことは望ましい事ではない。さうして置いては、兄の隱居が何事をしようか、これに喙を容れることが出来ぬであらう。永久に兄を徳として、その爲が儘に任せておなくてはなるまい。五百は此の如き地位に身を置くことを欲せぬのである。五百は深く此家を去つて澀江氏に適き、しかも其澀江氏の力を藉りて、此家の上に監督を加えようとするのである。

貞白は直ぐに抽齋を訪つて五百の願を告げ、自分も詞を添へて抽齋を説き動かした。五百の婚嫁は此の如くにして成就したのである(二百七)

六月 保、京浜毎日新聞(社長沼間守一、主筆嶋田三郎)編集員に就く。

八月 水木、山内氏(五百の生家)を冒し、芝錢町に一戸を構える。

明治十八年 一月 大蔵省印刷局罷役。

夏、喉頭癌を病む。

明治十八年 十一月二十五日 誕辰(誕生日祝い)の宴・日本橋三文楼。くじ

引きで、來客に蔵書を与えた。参加者は今村了庵、速田澄庵ほか。

十二月六日 枳園没⁷⁹。